

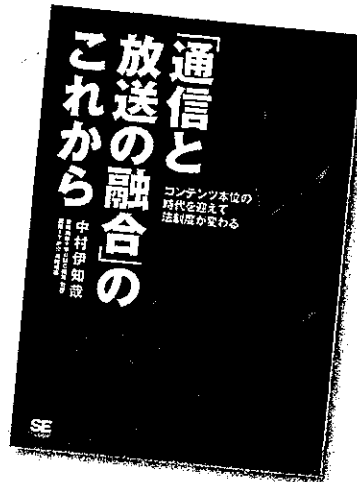
## BOOK

総務省の研究会などで活躍する慶應義塾大学DMC機構の中村伊知哉教授が「通信と放送の融合」の必要性とこれからの方向性について考察を述べた本である。

コンテンツの作成がプロからアマに広がりつつある現場の状況を踏まえつつ、流通面や制度面での課題を指摘。その上で、日本発のポップカルチャーを振興するための政策について、数多くの提言を寄せている。

例えば「直接の業界支援措置や規制強化よりも、距離感を保ちつつ緩やかな規制と誘導で、生産・利用者双方のうちに育まれてきた力を発揮するような環境を整えることが重要」といった意見などだ。抑圧的な状況から生まれたパンク・ムーブメントなどを引き合いに出しながら、新たなカルチャーが発生する場を大事にし、より懐の深い政策を求めるなど、その発言は示唆に富んでいる。

個人的に強く印象に残ったのは、著者自身の体験を



## 「通信と放送の融合」のこれから

中村伊知哉著/翔泳社  
2200円/四六判/264ページ

## REVIEW

交えてポップカルチャー台頭について語る第1章の部分。小学生を対象に自ら映像制作のワークショップを開催するなど、著者の行動には、大学時代に少年ナイフのプロデューサー的な立場として活動していた時代から脈々と持ち続けているであろう「パンク・スピリッツ」を感じる。このようなボトムアップ的な感覚を忘れず、通信と放送にまたがる法制度改革という巨大なテーマに挑む姿勢に改めて共感を持った。

なお2006年に総務省が開催した「通信・放送の在り方に関する懇談会」や、2007年末に報告書が出た著者も参加していた「通信・放送の総合的な法体系に関する研究会」での議論の経緯も本書で的確にフォローできる。

現在コンテンツ流通の現場で、何が課題になっているのか。2010年の情報通信法の国会提出に向けて、政策の現場ではどんな話題が進行中なのか。このような状況を読み解くために最適な本となっている。(堀越)

『日経コミュニケーション』2008年3月15日号 p109  
日経BP社の許可を得て掲載：2008/3/28